

# 感動呼んだ真摯な響き

エリザベト音楽大（広島市中区）の合唱団と交響楽団は、8月に初めての海外公演を行った。広島市の姉妹都市、ドイツ・ハノーバー（26日）と首都ベルリン（26日）の2会場。それぞれニーターサクセン音楽週間、およびヤング・ユーロ・クラシック音楽祭からの招待を受けて実現した。

本学はこれまでも、合唱団または交響楽団単独での海外公演の実績はある。今回は、合唱団59人、交響楽団50人のほか、指揮者、ソリストなど計137人による公演事業であった。演奏者には、6人の地元高校生および卒業生等の補助員が含まれる。

曲目は、ベートーベン「カンタータ・静かな海と楽しい航海」、シューベルト「交響曲第7番 未完成」、細川俊夫「星のない夜―四季へのレクイエム（ソプラノ、メゾソプラノ、二

## 寄稿 エリザベト音大ドイツ公演

川野 祐二



ハノーバーの教会で公演に臨む学生たち（エリザベト音楽大提供）

人の語り手、選声合唱、オーケストラのための）であった。広島市安芸区出身の細川氏は、本学各員教授を務めている。2

## 「広島音楽家」自負心育つ

ドイツ公演が決まった。ハノーバー会場は、新市街にあるプロテスタント教会で、客席数は約300。非常に響きのいい空間であった。学生は集中力を切らすことなく、のびのびした演奏を行った。終演後、スタンディングオベーションが起こり、会場を去る聴衆から「素晴らしいかった」と身ぶり手ぶりを交えて話し掛けられた。

ベルリン会場は、世界的に高い演奏会場の一つであるコンツェルトハウス。客席数は約1400で、内部空間が広く、前日の小規模で心地よい響きのホールとは全く異なる環境での演奏となった。清風の聴衆を前に、学生は一瞬にして緊張感が高まったが、前日の成功による自信が彼らの演奏を後押しした。音楽を通して平和を希求する広島の学生が、音楽に真摯に向き合う姿勢をベルリンの聴衆の心に焼き付けた。

「星のない夜」は第2次世界大戦の末期、1945年2月のドイツの古都ドレスデンに対する連合軍の無差別爆撃と、8月の広島への原爆投下という二つ

のテーマを組み合わせた作品である。被爆地の音大生がドイツの2都市で演奏し、会場に詰めかけた聴衆に感動を与え、恒久平和の願いを伝えることができたことは意義深いと考える。

同行した細川氏からは「欧州での初めての公演、指揮員の聴衆の前で、実に素晴らしい演奏をしてくれた。大変に感動した」との感想を頂いた。ベルリン滞在中の柿木伸之・広島市立大准教授も「『星のない夜』のベルリン初演で学生は完成度の高い演奏を聴かせてくれた。すさまじい破壊の表現も迫真のものだったが、それ以上に『星』の表現の深さや叙情的な表現の美しさが際立っていた」と評する。

学生自身も半年以上にわたる練習や、細川氏本人から解説を聞くことで、作品に込められたメッセージを体得した。また、ハノーバー会場では広島市と連携して原爆パネル展と被爆体験伝承者（本学講師）によるスピーチを行った。こうした取り組みを通して「広島音楽家」という自負心が醸成されたと感じている。

（エリザベト音楽大理事長・学長）